

講演

(3) 重挽馬の歴史と生産

石井三都夫

The History and Production of Heavy Draft Horses

Mitsuo ISHII



石井三都夫 (いしい みつお)

1978年に日本大学を卒業。同年、釧路地区農業共済組合に就職。以来、重挽馬の生産基地である釧路にて重挽馬の診療に従事。2003年に岐阜大学連合大学院において「重挽馬における分娩後の繁殖成績低下の要因とその予防および対策に関する研究」で博士号取得。2005年帯広畜産大学の准教授に就任、現在も大動物臨床教育、研究に活躍中。岐阜大学の連合大学院にも所属し、博士課程の大学院生の指導にも従事している。

皆さん、こんにちは。本日はこのような発表の機会をいただきまして、関係者の皆様に心からお礼を申し上げます。

実際、いただいたテーマで「重挽馬の歴史と生産」などという大それた話を、私ごときが話をしてもよいのだろうか。このウマ科学会のなかに大先輩の方々がたくさんいらっしゃるなかで、私の話がどこまで先生方に満足していただけるのかちょっと不安だったのですが、また本日は軽種馬に関係する方がたくさんいらしていると思うのですが、軽種馬の方にとっては重種馬、重挽馬の話などは聞いても仕方がないのかなというところで、私の話はできれば肩の凝らない話ということで、つまりはお休みの時間ということで考えていただければ結構かなと思います。本日はシンポジウムに入ってからまだ休みをとっていないので、頭をちょっと休める時間にこの時間を使っていただければよいかなと思います。それでは始めたいと思います。

テーマは「重挽馬の歴史と生産」ですが、まず重挽馬の歴史についてお話します。ずっと昔に遡りたいと思うのですが、皆さんご存じのように、馬の一番古い祖先はエオヒップスで犬ぐらいのサイズです。エオヒップスは前足が4本であったという話です。それがだんだん進化を遂げ、いまの馬の形になっていくわけです。現在の馬は学名を *Equus caballus* と言い、現在の馬が誕生したのは約100万年前と考えられています。

図1の左が、誕生したころの *Equus caballus* です。野生の馬としてモンゴルにモウコノウマ（図1の右）がまだ現存していますが、それにとっても近い形ではないかと言われています。

この *Equus caballus* は、実はアメリカ大陸で最初に発見されたそうです。アメリカ大陸から *Equus caballus* が世界に広がっていったわけですが、いったんオセア



図1 現代の馬の祖先

ニア大陸、アジアのほうに馬が広がっていった後に、実はアメリカでは *Equus caballus* が消滅したのです。不思議な話です。その後しばらくはアメリカ大陸には馬の文化がなかったということです。

アメリカに再び馬が持ち込まれたのはコロンブスがアメリカ大陸を発見した時です。一緒にヨーロッパから連れてこられたのが、今のアメリカの馬ということです。

さて、その馬なのですが、家畜化が始まったのは大体6,000年前とか5,000年前と言われています。ここで、いつも学生たちに話をするときには、13,000年前に最初に家畜化されたのは猫だという話をします。なぜ猫が家畜化されたのでしょうか。そんなことを生徒に質問します。皆さんは、わかりますか。猫は、いったい何をするのか。当時は人間が猫を食べたかもしれませんが。実は猫というのは鼠をとってもらうために家畜化されたのです。自分たちの周りに最初に寄ってきたのが猫だった。当時は、たぶん狩猟民族から農耕民族に変わっていく時代だったと思うのですが、農耕で収穫

Domestication of animals

• 1万3千年前
13000 years ago

ネコ
Cats

• 1万年前
10000 years ago

イヌ ウシ
Dogs and Cattles

• 5千年前
5000 years ago

ウマ
Horses

紀元前3500年ごろのユーラシア大陸において
馬の家畜化が始まる

Domestication of horses started in Eurasian continent since 3500 BC.

日本では5～6世紀に大陸から馬文化が伝わった

In Japan, the horse culture was transmitted from continent in the 5th-6th centuries.

図2 動物の家畜化

したものを自宅の周りにストックしたのです。そのときに邪魔だったのが鼠なのです。せっかくストックした作物をどんどん食べてしまう。それに対処するために猫を飼いました。猫が最初で、犬や牛、次いで馬が家畜化されたのです。

そういう経緯で、馬との関わりは5千年以上にもなります。人間と馬は一緒に生活するようになり、馬文化がつくられていったわけです。馬の最初の用途は、馬乳や馬肉だったようです。その後に使役に利用されるようになり、最終的に背中に乗るようになったのは、2,500年～3,000年くらい前のことです。

その馬たちがヨーロッパからだんだんに家畜化されていったのですが、日本に伝わったのは5～6世紀ではないかと言われています。それまでは日本にも馬の文化はありませんでした（図2）。

The Hokkaido Japanese horse originated from Nanbu Japanese horse

• 北海道の先住民に馬産の歴史はない

The indigenous people of Hokkaido do not have the horse history.

• 15世紀に和人が持ち込んだ南部和種(東北地方)が起源
(→北海道和種)

The Nanbu Japanese horse which was brought from the northernmost region of Honshu in the 15th century, Is the origin of Hokkaido Japanese horse.

絶滅した南部馬

Extinct Nanbu Japanese horse



図3 北海道和種の起源は南部馬

さて、私のテーマである重挽馬ですが、北海道の重挽馬のおおもととは北海道和種馬です。その北海道和種馬の起源が、実は東北地方の南部馬です。南部藩の人たちが蝦夷地を開拓するために連れてきたのが、いま

の北海道和種馬、いわゆる道産子の起源になります。

北海道には元々先住民のアイヌの方々がいらしたわけですが、アイヌの民族の中にも馬の文化はなかったそうです。

その馬が全くいない土地に馬を持ってきて、それを使役に使い、また使わないときには放牧するというなかで、放たれたものがそのまま自然に繁殖をして、いまの道産子に変わったのです。

実は、その持ち込まれた南部馬は残念ながら絶滅してしまい、いまはもう現存していません（図3）。

History of heavy draft horses

• 北海道開拓時代、使役や農耕を目的に和種馬を基に、アングロノルマン(フランス)やペルシュロン(フランス)などを導入し改良された

Since the Hokkaido exploitation era, Horses based on Hokkaido Japanese horse were improved by breeding with imported Anglo-Norman and Percheron from France.

• 戦時中、軍用馬の生産改良が行われ日本釧路種が誕生

During 1st and 2nd World War, a lot of military horses were improved and produced in Hokkaido, then Nohon-Kushiro horse was produced and recognized as the first Japanese breed.



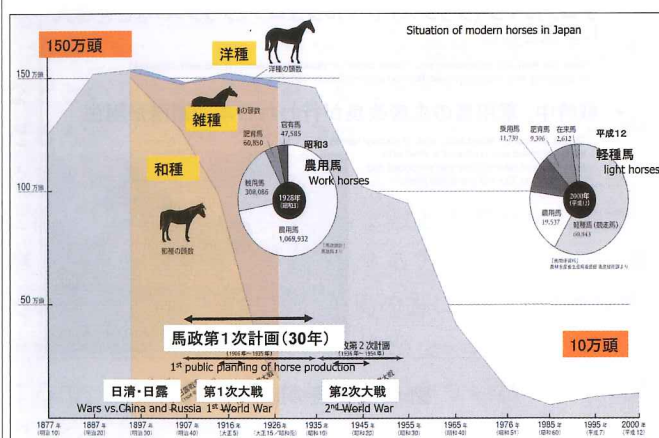
図4 重挽馬の歴史

使役を目的に、農耕や軍用馬として用いるために、重挽馬は道産子をもとに体をとにかくどんどん大きくしなければいけないというニーズのなかで、アングロ・ノルマンやペルシュロンを導入して改良されてきました。そして、体はどんどん大きくなっていきます。軍用馬の生産については、明治時代に馬政局ができて、盛んに補助金を出してその生産に努めました。

私が勤務していた釧路地区 NOSAI、釧路地方、これも大馬産地だったのですが、その馬産地の中でも軍用馬の生産が、戦時中は特に盛んに行われていました。その釧路の生産者の人たちが軍用に適する馬ということで、引っ張る、もしくは駄載する、人が乗る、重い物も運ぶことができる、そのような馬を改良してつくりました。

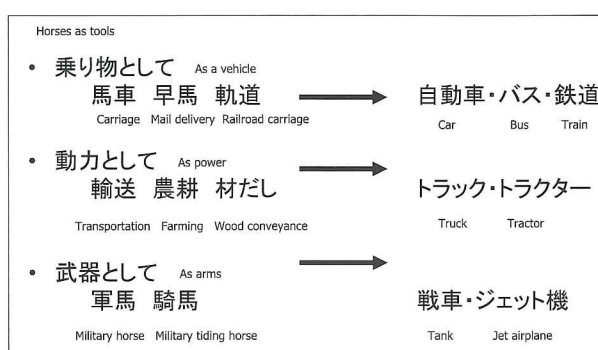
それがこの日本釧路種という馬なのです。釧路のほうに「大楽毛」という駅があるのですが、何と読むでしょう。わかる人はいらっしゃるでしょうか。そうです、「オタノシケ」です。大楽毛という釧路地方の市場があった所ですが、そこで一度に3,000頭を超す馬の売

この馬のほかに釧路奏上種というのが作られているようですが、そのような経緯で釧路ではこの馬がいまの重鞍馬の基になっています（図4）。



戦後、昭和30年頃までは、馬の頭数は横ばい状態で経過しています。ところが、昭和30年を契機に、いままで使っていた馬の用途がだんだんなくなります。例えば農用馬である場合にはトラクターが出てきて、実際には機械化されて、機械でいろいろな生産ができるようになってきました。あと大きいのが運輸関係です。

馬の頭数だけではなく、実際に飼われている品種も変わってきています。昭和の初めの頃の品種ですが、ほとんどが農用馬です。先ほどの軍用馬も含めて多く飼われていたのが使役馬です。ところが、皆さんもご存じのとおり、いま現在では、軽種馬が中心になっているのが日本の現状です（図5）。



これはベルジャン（図9）。元々はベルギーが主な



図7 北海道に輸入されたベルシュロン種雄馬



図8 北海道に輸入されたブルトン種雄馬



図9 北海道に輸入されたベルジャン種雄馬

産地なのですが、北海道には主にカナダから入ってきました。カナダを経由して持ち込まれたカナディアン・ベルジャンです。

実はこの馬が一番体高が高い馬です。この手綱を

持っている人がすごく背が高いので、馬は小さく見えますが。実は、先ほどの人は背が小さいのです。だいぶ違いますね。この方は木村さんというのですが、木村さん、ごめんなさい。

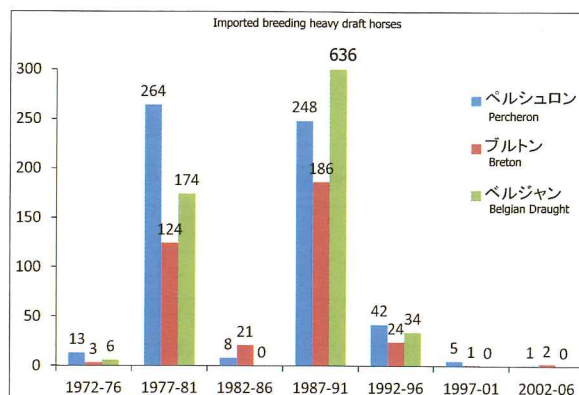


図10 重挽馬の繁殖用馬の輸入

ということで、ベルシュロン、ブルトン、ベルジャンとか、そういう種雄馬たちなのですが、実際には1977年代にたくさん輸入されています。1980年代にもかなりの馬が輸入されています。このあたりが重挽馬の生産が一番盛んな時代であったのだと思います。

近年になって、ごらんのとおり外国から種雄馬が入ってこなくなっているのも現状です。頭数がどんどん減っていくなかでも、種雄馬にも新しい血が入ってこない。いまそういう問題も生じてきています(図10)。



名馬 スーパーベガサス号 ばんえい記念4連勝(2006年まで)1億円馬

図11 北海道ばんえい競馬(1947年より)

皆さんご存じの北海道の挽曳競馬です。挽曳競馬自体は1947年にスタートしています。戦争が終わったの

が1945年ですから、1947年という、第二次世界大戦で敗戦して本当にどさくさの中というか、みんなが希望を失っている中で、北海道の幌曳競馬が始まったのです。

図11は、ついこの間まで活躍していた、スーパーペガサス号と言います。これは幌曳のなかでも1億円を稼いだ馬です。残念ながらこの馬は蹄葉炎で世を去りましたが、現役時代は私も本当によく応援に行きました。

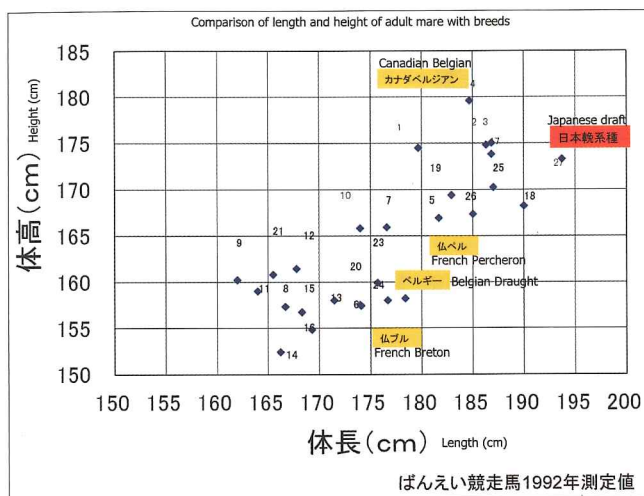


図12 各品種の成雌馬の体長と体高

この幌曳競馬とはどんなものか。図12は、帯畜大の柏村先生が実際に計測された世界の農用馬のデータを、私がお借りしたものです。実際、幌曳競馬の馬は、日本の重挽馬、日本挽系種といまは言っています。実は日本の重挽馬は、世界の馬の中で一番体長が長いのです。そして、体高についてもトップレベルです。先ほど出てきたカナディアン・ベルジャンが一番高いのですが、それに肩を並べるようです。ベルジャンの系統がよく入っていますので、いまの重挽馬たちはこの当時よりもさらに体高を伸ばしています。いまでは体高が190cmを超える馬も出てきていますから、そういう意味では、いまの重挽馬のレベルはまさに世界のトップレベルです。

そのような馬がいまレースをしています、実際にレースが行われているのは帯広しかありません。皆さんは、そういう世界で1つしかない重挽馬のレース、そして世界で一番体の大きい馬たちを見る機会があるわけです。北海道に来たら、ぜひ帯広に来て、幌曳競馬を応援していただきたいと思います。

応援しよう！ Let's support!

ばんえい十勝

BANEI Tokachi

インターネットで実況ライブ配信中
http://www.banei-keiba.or.jp

FOMAテレビ電話で実況ライブ配信中
* 8607 * 63399

図13 応援しよう！ばんえい十勝

ばんえい十勝です。いま、インターネットでライブ中継をどこからでも見ることができますので、是非応援していただきたいと思います。実況ライブが携帯電話にも配信されていますので、是非ごらんになって応援してください。そして、応援だけではなくて、是非とも1票でも2票でも購入していただけると、さらに幌曳競馬の存続が可能になると思います(図13)。

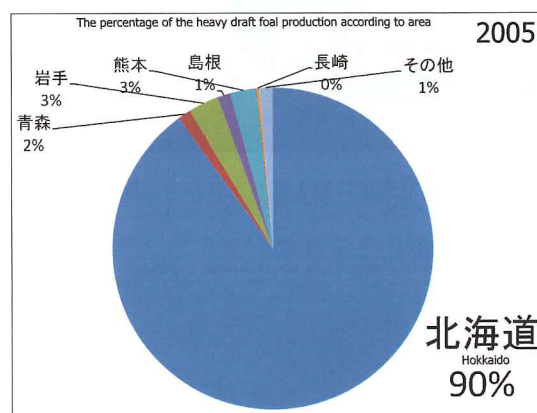


図14 地域別生産割合

さて、その重挽馬についてですが、重挽馬の生産地帯は主に北海道です。私がいまテリトリーにしているのが道東。帯広、釧路、根室、一部は北見を含みます。そのあたりが重挽馬の生産基地になります。北海道の日高は軽種馬の生産ではナンバーワンですが、実は重挽馬については道東のほうが日本の主な生産地なのです。ということで、9割が北海道で生産されています(図14)。

そして、重挽馬のもう1つの特徴としては、実際には幌曳競馬に向いているのですが、幌曳競馬で実際に走っているのはそのうちの約200頭です。それ以外の

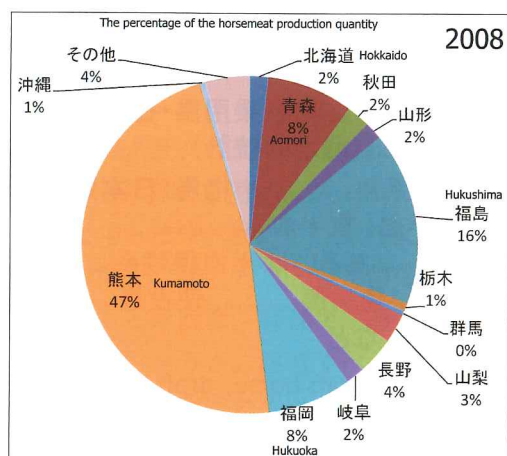


図15 馬肉生産量の地域別割合

ものは肉馬として今度は本州に送られていきます。馬肉の生産が盛んなのが九州です。熊本を中心とした九州です。あとは福島です。青森にもあります。北海道は本当に2%だけで、北海道で生産した馬が本州に行って肥育され、それが馬肉になるのです。この馬肉が、いまの重挽馬の生産を確実に下支えしています（図15）。

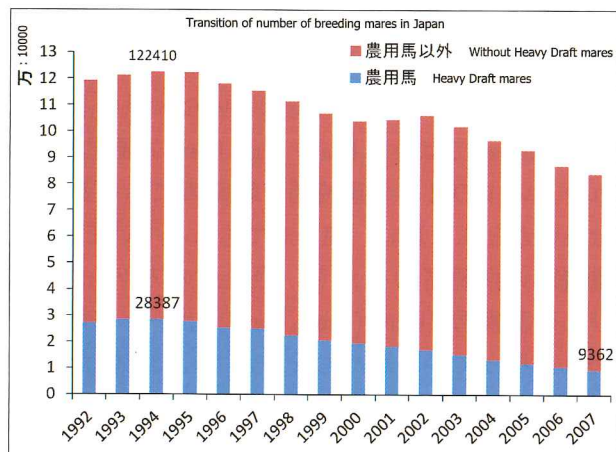


図16 飼養頭数の推移

図16は日本全体の飼養頭数の変化です。10万頭いたものが、ここ15年は徐々に減り、いまでは8万頭を切るまでに減っています。

図の水色が農用馬の数です。例えば1994年には3万頭近くいたのが、いまでは1万頭を切っているので、このたかだか10～15年の間に3分の1にまで減少してしまいました。ゆゆしき問題です。

図17は重挽馬の生産頭数です。生産頭数も1992年には11,000頭であったものが、現在では2,000頭ほど

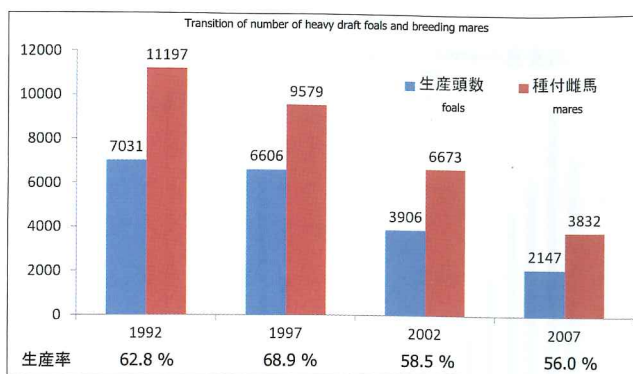


図17 生産頭数および繁殖雌馬の推移

になっています。生産率ですが、この数字を見ていると、すごく気になります。62%、68%といていた生産率が、近年さらに低下しているのがゆゆしき問題で、生産意欲も含めて、何とかしなければいけないと思います。



図18 種雄馬の頭数推移

図18が種雄馬の頭数の推移です。種雄馬の頭数も、やはりここ15年の間に減ってきていますが、つい5～10年ぐらい前までは、それなりに種馬の頭数を頑張って維持していたのです。濃い青色が1頭当たりの重挽馬の種付け頭数です。徐々に種付けの頭数も減少し、もう10頭を切っている状況です。ここ5年の間に半減しました。これが重挽馬の現状です。

その重挽馬の生産を下支えしている馬肉関係の動向を少しだけご紹介します。ここ30年の馬肉消費量のデータですが、消費量が年々減少傾向を示しています。ピーク時からみると1/4まで消費量が減っています。困ったことに、それでいて輸入馬の数は年々増えているのです。輸入されている馬がいるので、なかなか北海道で生産した馬を買っていただけないのです。しか

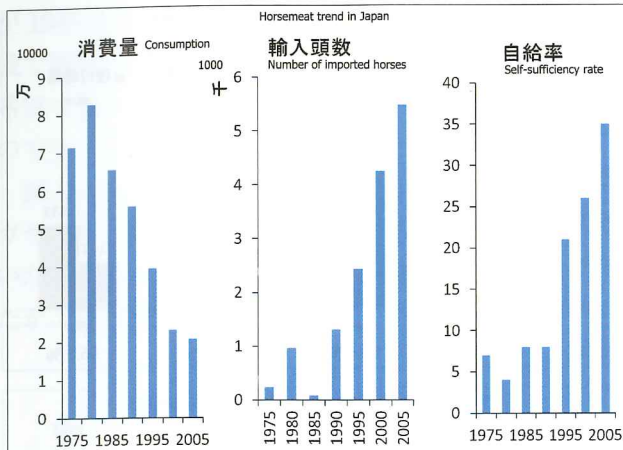


図 19 馬肉関係の動向

し、そのような中でも、日本における馬肉の消費に対する自給率は若干上がっているのが現状です（図 19）。

輸入すると運賃もかかるわけですが、それがいったいどのくらいの経費になるかというので、北海道ではいくらで買ってもらえるかというところにつながるのです。この 5～6 年前までは、1 頭当たりの馬の値段が 50 万円を切るような状況が出てきて、50 万円を切った段階で生産している人たちはもうどうにもならない大赤字の状況なのです。ここ数年は 60 万円程度で落ち着いてきているので、農家の人にとっては、そのくらいの価格がどうも生産ベースのぎりぎりのラインだと考えられています。

ということで、世界では重挽馬の生産の基地が限られています。日本の重挽馬の体格は世界のトップレベルというなかで、日本以外の国では挽曳競馬のような競技は行われていません。

北海道は世界的に珍しい重挽馬の特産地であります。こうした重挽馬の生産技術については、日本から是非発信していかなければいけないと思います。挽曳競馬は、日本の馬のルーツであり、なくてはならない文化遺産の 1 つです。ぜひ、会場の皆さんも応援してください。

最後に 1 つ。私がやっている重挽馬の呼称についてです。軽種に対して重種という言葉があります。これは LeBlanc 先生にもあとで聞いてみたいと思うのですが、外国人に話してみますと、heavy horse というひびきが、fat horse（太った馬）というイメージでとられるようです。私が何か論文を書くときに、重種馬を heavy horse と書くと、何となく向こうの人には誤解を与えて

Naming of heavy draft horse

- 軽種・中間種・**重種**(heavy horse)・在来種(馬政局)
- 軽種馬・**農用馬**(work horse)・乗用馬・在来馬
• **肥育馬**(meat horse) (農水省統計)
- 乗系馬・**挽系馬**(draft horse)・小格馬(日本馬事協会)
- 系種、中半血、**重半血**(heavy mixed breed)、**重系種**(heavy breed)あるいは**半血種挽系**(mixed breed draft horse)、**挽馬**(draft horse)、**農耕馬**(work horse)、**使役馬**(work horse)、**挽曳馬**(draft horse)など
- 海外文献では**Draft horse**, **draft breed**, など“**draft**”が使われる
- **Heavy horse** は使われない
- **Heavy draft horse** の直訳の“**重挽馬**”

図 20 重挽馬の呼称

しまうようです。

重挽馬の呼称については、農用馬であるとか肥育馬であるとか挽系馬、そのほかにも、最近では日本挽系種、そのほかにも使役馬であるとか重半血、重系種、挽馬とか農耕馬とか、いろいろな呼び方があります。海外の文献では draft horse と呼ばれているのですが、日本のドラフトホースは海外のドラフトホースとは違うのだということで、もう一工夫ほしいなと思い、重挽馬を heavy horse ではなく heavy draft horse と訳しました。これが、いまの日本の重挽馬を呼ぶのにふさわしいのではないかと私は思い、使わせてもらっています。

重挽馬の関係者の人たち、軽種馬の方々も含めて、ぜひこの重挽馬 (heavy draft horse) という言葉で、われわれの扱っている馬たちを呼んでいただけたら幸いです（図 20）。

最後に、重挽馬をテーマとして、いま NHK 札幌放送局で番組が作られています。これは 2012 年 2 月に放映される予定になっています。ついこの間、ばんえい競馬場にお伺いしたときに、この放映のために現地でのビデオ撮りが行われていました。主演しているのは高良健吾さん、寺脇さん、この 2 人は朝の番組でついこの間終わった「おひさま」で、主人公の旦那さん役やお父さん役を演じていた 2 人です。そういった方たちが出る番組があります。これは全国放送の予定ですので、ぜひごらんいただきたいと思います。

ということで、これからも重挽馬のことをよろしくお願ひしたいと思います。帯広に来たら是非、ばんえ

い競馬場に足を運んでいただきたいと思います。

きょうはどうもありがとうございました。

【田谷座長】石井先生，どうもありがとうございました。それでは，お1人質問を受けます。

【山口】山口と申します。教えていただきたいのですが，私は重軌馬にはまだ接したことはありません。もし重軌馬を飼育するとすれば，軽種馬と最も違う点はどのようなところでしょうか。注意すべきところ，あるいは心を配るところ，そういうところがありましたら教えてください。

【石井】私自身は軽種馬を飼育したことがないので，実際にはその違いを何と表現したらよいのかわからないのですが，自分としては道産子を持っていたことがあります。道産子と重軌馬とあまり変わらないと思うのですが，それなりに粗飼料さえ与えていれば十分に大きくなるので，餌に関してもそれほど贅沢をさせる必要はないと思います。

むしろ運動が少なくて，太りすぎるのが問題です。分娩のときに太りすぎていると，そのあとに産褥熱があったり，後産が残ったりといろいろな障害が起きてくるので，できれば太りすぎに気をつけることと，運動を心がけてもらうことが一番です。平らな所，狭い所で扱っていると肥育馬のようにぶくぶくと太ってしまうので，できれば少し広めの，傾斜があるような所で飼っていただければよいかなと思います。

北海道では山に放して，山の笹とかを食べさせる，そういう地域もあります。実際そういう放牧地を持っていると，粗悪な粗飼料だけでも冬を越すことができますと思います。

実際そんななかで痩せたとしても，今度は分娩したあとはちゃんと餌をあげることによって，ボディコンディションスコアも上がり，受胎も可能になると思います。こうした点が管理のポイントでしょうか。

【山口】ありがとうございました。